

2006
2.28
火曜日

南日本新聞

夕刊

瀬尾 昭一郎 健康コラム 思うこと

第6回

私の漢方 事始め

私の父は中学のころから心臓病に悩まされていた。治療薬には副作用があった。大人になるまで、薬を飲むたびに湿疹、だるさにおそわれたと言う。戦後ようやく漢方薬によって、長い間の苦しみから解放された。

体験を通して父は漢方の研究を続けるようになった。ふとしたことで父の祖先が漢方医「何欽吉(かきんきち)」であり、「薬用竹節人参」を発見したことを知った。このことは父の漢方研究をさらに深めることになった。家族

は病気になると漢方薬を飲まされた。

小学一年生まで私はオネシヨが治らなかった。父が漢方薬を煎じてくれた。出来上がりに米あめを二個入れた。甘みはあったがおいしくなかった。子供のためにあめを入れてくれたと思っていたが、それが漢方薬の処方だった。

母は胃が弱かった。果物など夜に食べすぎて、翌日胃の痛みを訴えることがよくあった。ある日、胃が重くて食欲がまったくなかった。胃がんではないかと疑った。父は漢方薬をせんじて飲ませた。大学を卒業した私は、ある漢方系製薬会社に勤めた。仕事でストレスや睡眠不足、酒が重なり体調を崩してし

まった。体重が減り、胃痛でふらつき気力がおとろえた。口の周りのひげそりあとが化膿して赤く腫れあがった。漢方の勉強を始めたところだった。試行錯誤をしながら、一年後に回復した。自分の処方に自信を持った。

父と同じ漢方の世界の入口に私は立つたと思った。知るほどに漢方の世界は多彩である。自然の恵みの中に漢方の世界はあるのだ。最近、漢方薬も身近になり、服用もしやすくなった。だが、安易な身近さではない大事な身近さになるよう、漢方の普及に努めたい。

